

FRPPの特性を再検証

これがFRPPだッ!

③

FRPPの特性を再検証する企画シリーズの第3回は、建立後十五年余りの間、一度も手を加えることなく創建当時の姿を保って多くの信者の信仰を集めている「世平和観音像」通称「宇佐美観音」についての報告である。

87年建立の宇佐美観音

全高34尺は奈良大仏の倍以上

JR伊東線・宇佐美駅の真西に当る天気の山腹にある。しかし、鉄筋コンクリート西に当る天気の山腹にある。宗教法人・大本山・静岡興伊東市宇佐美天宝山三九九六一二〇五、電話〇五五七四七局〇六八番の山主、故妙尊日興大僧正の発願により、世界平和を願って「宇佐美観音」像が建立されたのは、昭和六十二年(一九八七年)七月のことである。

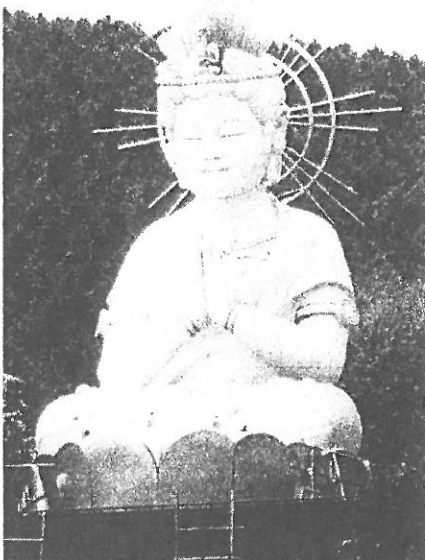
当初、この観音像は在来工法の鉄筋コンクリート造で銅像としての建立が予定されて、奥行が約一五尺、ちなみ

に、奈良の大仏の全高は四九尺八寸、鎌倉の大仏の全高は二・三二尺の建造物をFRPP製人工滝で晴園ウル

地盤が脆弱なうえ傾斜が急な山腹の現場で施工するとすると、工期、工事費、作業時の安全性の確保などに種々問題があることが分り、計画が難航したといわれる。この話を耳にしたエフ・アール・ビー・サービス(大阪市西区阿波座一五一九)電話〇六六五三五局〇七九七番の柳田恒明社長が、FRPP製人工滝で晴園ウル

のホテル・ロッテ(78年、延約二〇〇平方尺施工)、など豊富な実績のあった能登高分子工業(株)と共にならびに自己破産と共に大本山を訪れ、FRPPの強度を示す構造計算の資料や耐候性を示すFRPPの特性データ、さらには能登高分子工業(株)が施工した人工滝の実績等の資料を示して、同観音像のFRPP化を提案した。

大本山側では、これの資料を慎重に検討した結果、昭和六十二年六月に、観音像をFRPP製とすることに決定、エフ・アール・ビー・サービス(株)と能登高分子工業(株)の両社に工事が発注された。工事は、観音像の原型をもとに、まず右こうによる二〇分の一のモデルをつくり、原作者のチェックを経て、次に五〇分の一の模型をつくらせて分割方法等が慎重に検討された。



厳しい潮風にさらされ 創建時の美しい外観保つ

鉄筋コンクリート造の台座

形されることになった。各パーツの肉厚は、最大風速毎秒六〇の風にも耐えられるよう平均厚さ四・五で成形された。

当初の分割案に基づいて、最大寸法の三・五×五の部分を試作した結果、この大きさでは大型トラックが入れない現場に搬入することができないことが分った。

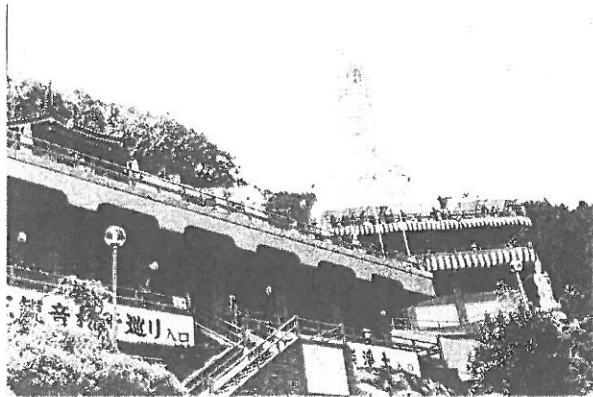
当初は、仏像全体を横に一分割、タテ方向に四分割、複雑な形をた頭と顔の部分は二分割(〇分割とし、全体で六)パーツ位に分割成

時間当り五万円)費用がかさみ過ぎるといふことで、各パーツを幅二丁三丁、長さ三丁四丁に抑えることで、最終的には二〇〇パーツに分割成形された。

これらのパーツは、鉄骨製の骨組に鋼鉄製の支柱によって堅固に固定されたうえ、各パーツは内部フランジを接着剤とボルトを使って接合された後、表面両面からFRPPのオーバーレイ施工を行ない、

雨露が像内に浸入するのを防いでいる。表面は耐候性の白いウレタン系塗料で塗装されている。工場が成形されたFRPPパーツの総重量は約八ト、前記のように接合部の表裏や鋼製の支柱の固定部等のオーバーレイ用に現場で使われたFRPP材が約二ト、合計約一〇トの重量になるが、これは銅像にした場合の二〇分の一、鉄筋コンクリート造の場合の五分の一の重量であり、基礎工事の簡略化と工費の節約に大きく貢献したといわれる。それにも増して詳細されているのは「最近になって何箇所か雨洩りする部分があて

補修したことがあるが、それ以外はこれまで仏像本体に手を加えたことはない」というメンテナンスフリーなFRPPの特性である。ちなみに、この宇佐美観音の後に建立された石川県加賀温泉町や茨城県牛久市の仏像は、内部に不特定多数の人が入って見学する仕組みになっているため、不燃材で建設せざるを得なかった。これに対して、宇佐美観音は、参詣者が下から仰ぎ見てお詣りするだけで、仏像の内部には立ち入ることができない仕組みになっているためFRPP製にすることができたのである。



写真は「宇佐美観音」がまつられている宗教法人・大本山(通称宇佐美観音寺)の全景